

□2月1日説教(隅野徹牧師)短縮版「御言葉を聞いて受け入れる人」(マルコ4:1～9,13～20)

この種まきのたとえで「種が蒔かれる」とは、神の言葉が語られ聞かれることだと教えられるのですが、蒔く人は神ご自身であり、神の言葉として蒔かれる種とはキリストご自身だ、と私の胸に迫ってきたのです。ヨハネによる福音書1章14節「ことばは肉となつて、わたしたちの間に宿られた」という言葉と、種まきのようにして、神の言葉がわたしたちのところへ届くという今回の箇所の内容が、重なりました。

神の言葉である種がまかれる土地とは、私たち人間一人ひとりを表しています。神の言葉としてこの世に来てくださった、私たちの間に宿られた救い主イエス・キリストをどのように受け入れるかによって、大きな違いがでるといふことなのではないでしょうか。

15節以下では、神の言葉であるキリストが来られても、その人が踏み固められた道端のような心、石ころだらけのような心、あるいは茨だらけのような心でイエス・キリストに向き合うとすれば、実りにならずにだめになってしまうことが起こると教えられる。

わたしたち一人ひとは、神の言葉であるキリストを迎えられず、実りをもたらすことができない悪い土地の、どれにも当てはまるのではないかと思われるのではないのでしょうか？私も正直にいってそうです。

しかしここで終わらないところがこの話の「ミソ」だとおもうのです。良い土地になることなど到底できない。神の言葉として私たちの間に宿られたキリストを、よい状態でお迎えできない。そんな私たちが集まったこの世の中でも、神の言葉の種は、30倍、60倍、100倍の実をもたらすのだという希望が語られます。それは種であるイエスご自身と土地が一体となって死に、復活することによって可能になるのです。よい土地になれない私たちでも、キリストと一体となり、永遠の命という無限大の実りをもたらすことに希望を持っていきましょう。(終)